Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-28

杉之原寿一著『現代部落差別の研究』 : 野呂栄太郎賞授与さる

真田, 是
杉之原, 寿一
高尾, 一彦
則武, 保夫
井上, 庄七

(Citation)
社会学雑誌,2:234-240

(Issue Date)
1985-03-01

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81010726

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010726

KOBE UNIVERSITY

特集記事

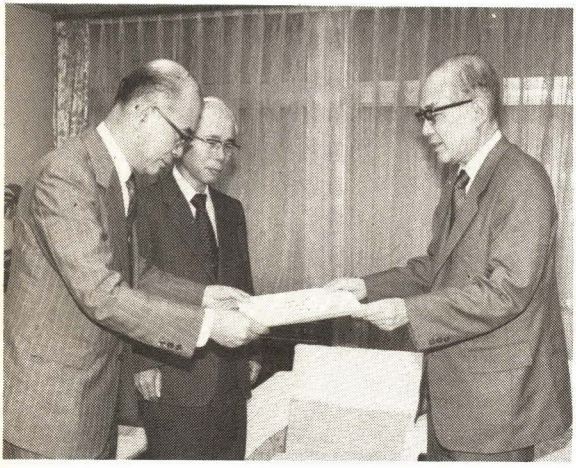
杉之原寿一著『現代部落差別の研究』
――野呂栄太郎賞授与さる

野呂栄太郎賞とは

一九三四年二月一九日に、野呂栄太郎は、三三歳と一〇ヵ月の短い生涯を閉じた。その前年に治安維持法によって特高警察に逮捕され、品川署に留置中のことであった。

しかし、その短い生涯のなかで、野呂栄太郎は不朽の名著『日本資本主義発達史』を遺した。弱冠二六歳にして書かれたこの著作は、かれの天才的な能力をいかんなくしめしたものである。また、かれの逮捕と死によってわずか一年足らずの結婚生活でおわった塩澤富美子氏の著『野呂栄太郎の想い出』は、かれの純朴で誠実な人柄と、不屈の精神とをよく伝えて、読むものに深い感動をあたえている。

本年は、くしくも野呂栄太郎没後五〇周年にあたる。また没後四〇周年を記念して「野呂栄太郎賞」が設定されてから一〇年目にあたる。そして、この記念すべき第九回野呂栄太郎賞が、杉之原寿一教授の著書『現代部落差別の研究』（部落問題研究所刊）にたいして授与された。



（長谷川善計「杉之原寿一著『現代部落差別の研究』の野呂栄太郎賞受賞にあたって」（『経済』一九八四年一二月号）冒頭部より引用）

杉之原氏の部落問題研究について

立命館大学産業社会学部教授
真田　是

杉之原寿一教授の部落問題研究には、ふだんからごく日常的に接し、いろいろと教えられてきたが、野呂賞を受けられてから、改めて杉之原教授の部落問題研究の特徴を書けと言われると自信がなくなってくる。きちっと読みこめていたのだろうかということである。しかし、余り事新しく構えずに、これまで教えられ感じていたことのなかから、思いつくままにいくつかを拾いあげることにする。

社会学者による部落問題研究は、磯村英一氏、鈴木二郎氏、山本登氏などを始めとしてかなり行われてきた。しかし、そこに何か方法上の共通性があったのかとなるとなかなかむずかしい。強いて言えば、部落問題研究の主要なジャンルの一つである歴史学的研究とは異なるところで行われてきたものという程度のくくり方しかできない。なかには、社会学者の研究であって、家族・同族研究や文化研究の視点から歴史研究に参加するような例さえ見られる多様さぶりである。

こうした中にあって、杉之原氏の研究は、同和地区を階級構成・職業・労働を主軸にすえて実証的に解明することを基礎にしてきたと言うことができるように思う。杉之原氏の研究のこの部分は、戦後の部落問題研究および解放運動にきわめて大きな影響を与えたものである。戦前の部落差別・部落の実態からつくられたフレームで戦後の部落問題をも律しようとしてきた方針に対して、戦後過程での部落問題の変化を科学的な事実をもって明らかにし、戦後の新たな理論形成と解放運動のあり方を要求するものになったからである。

こうした基礎研究の上で、杉之原氏自身も、戦後の部落問題についての理論形成に参加してきている。ここでは、朝田理論と言われたものを、持ちまえの精緻な追求で、くまなくデータに当たり正確に徹底的に洗い出したところに特徴がある。その上で、一方では実証研究の成果を駆使しながら朝田理論の虚妄性を明らかにし、他方で理論構成における論理矛盾をえぐり出してきた。

杉之原氏の部落問題研究の三つ目の分野は同和行政研究である。これは、基礎になっている実証研究からの当然の筋道として、戦後の部落問題の実態に即した妥当な同和行政のあり方の提案が出てくる。また、戦後の部落問題の理論研究からも、解放同盟による不当・不公正な同和行政についての要求との関わりでも、その批判と公正・民主の同和行政のあり方を研究し提案することになってきた。

杉之原氏は深い社会学の素養を身につけている研究者である。したがって、杉之原氏の部落問題研究には、私のよ

うな同学の者には読みこむことができ分りやすいというところがいろいろあるのかもしれないと、いまあらためて思えるところもある。

しかし、杉之原氏は、部落問題研究を、とくに社会学的に展開しようとは考えてきていないことも確かである。最近、一部に、社会学のなかの流行の理論や方針から部落問題を手がけてみるようなものも見られるが、杉之原氏の部落問題研究には、こうしたところは微塵もない。

杉之原氏にあるのは、部落問題を解決し、部落住民を部落問題から解放するのにはどうしたらいいかという燃えるような研究上の情熱である。これが杉之原氏の部落問題研究の大黒柱になっている一つのものである。そしてもう一つの大黒柱が、にもかかわらず運動や解決に都合のいいことだけを見、主張する恣意的な主観主義、安手のイデオロギーを厳にいましめた科学的精神と言うことができる。いいかげんな仕事が一切ないのが杉之原氏の特徴である。

杉之原氏の社会学の研究には階級意識の研究があった。これからの情勢は、部落問題研究での意識研究を必要としてきている。杉之原氏がこの点でも蓄積を生かされて、われわれ後進の者を指導され、部落問題の完全解決へのさらなる寄与をされることを願っている。

杉之原先生の受賞をお祝いする祝賀会は、部落問題研究所主催(十月二七日、於京都)、神戸大学有志主催(十一月二日、於神戸)、兵庫部落問題研究所主催(十一月十五日、於神戸)のものがおこなわれましたが、神戸大学有志主催の祝賀会から主に取材したのが、以下の記事です。

野呂栄太郎賞受賞にあたって思うこと

杉之原寿一

本日はご多忙のところを私のためにお集まりいただき大変ありがとうございました。過分のお褒めやご評価をいただき恐縮いたしている次第です。

私がこのたび野呂栄太郎賞を受賞できたのは、自由に、のびのびと研究することを許していただいた大学の諸先生方、とりわけ文学部の先輩・同僚の先生方のお蔭であり、心から感謝しております。私は若い頃から、何かに拘束されることが嫌いでした。それは今日に至るまで変わっておりません。大学の教師という道を選んだのも、そのためです。

例えば、サラリーマンになれば毎朝定時に出勤し五時まで働き帰宅するという時間の拘束がありますので、私にはそんな仕事はとても勤まらないと思い、時間に拘束されない職業に就きたくて、少し乱暴な言い方かもしれませんが、

消去法で大学教師を選んだというのが本当のところです。

若い頃の一時期を除いて、三〇年以上も私は神戸大学に身を置いてきましたが、神戸大学はそういう私を暖かく迎えてくださり、しかも、のびのびと自由に研究させてくださいました。とりわけ部落問題というアカデミックな環境に馴染みにくい分野にすすんだことに対しても、寛容であるだけでなく正当な評価を与えてくださいました。とくに今日お集まりいただいた先生や同僚の方には格別のご支援とご配慮をいただいたものと感謝しております。

また、今回の受賞にあたって、大学関係者の方々と同時に私が深く感謝しておりますのは、京都の部落問題研究所、神戸の兵庫部落問題研究所、あるいは兵庫県をはじめ全国各地の解放運動や行政関係の方々に対してであります。私がたずさわってきた部落問題は大学の研究室に閉じこもっていただけではとてもできない仕事でしたから、これらの機関や組織の方々に大変ご厄介になりながら、またその支援をうけてどうにか今日までやって来れたような次第です。その過程では現在京都の部落問題研究所の顧問をなされている木村京太郎氏、あるいは兵庫県部落解放連合会の委員長をされている近藤猛氏をはじめとした数多くの方々との印象深い出会いがあり、これらの方々から得た教えや励ましは今日に至るまで私の大切な宝となってきました。

今回の受賞にあたっては、これらの機関や組織の方々も私のために祝賀会を予定してくださっており、先日も京都で、多くの研究者や運動関係者による祝賀会を開いていただきました。私の受賞を喜んでくださる人々が大学外にも沢山おられることを知り、感激にたえません。私のこれまでの仕事をこのように支え、見守ってくださった大学関係者の方々、あるいは大学外の機関や運動の方々に対して、今回の受賞が何ほどかの恩返しとなりますれば、私にとってこれ以上の喜びはございません。

また、本日は肩の張らない席ですので一言申させていただきます。私が「拘束嫌い」であることは先ほど申したとおりですが、その点では家庭に対しても同じでした。最近はそうでもありませんが、以前は行先や帰宅時間を家内に告げないまま外出することが通例でした。行先を告げずに外出しても、その日のうちに帰宅すれば、それ程家内にも迷惑はかけないのですが、私は従来から神戸大学の研究室などを拠点にして活動しておりましたので、先ほどの小野理子先生のお話にもありましたように大学の研究室などで寝泊りすることも多かったのです。もちろん、家を空けるといっても通例は二～三日なのですが、一度行先も告げないまま一週間帰宅しなかったことがあります。当時私は神戸大学教職員組合の書記長も務めており、原稿書き・ガリ切り・印刷（手押しローラー式）という作業をひとりでやったりしていましたから、その関係もあり余計帰宅できず

大学に寝泊りしていたのだと思います。この時はさすがに家内も心配したのか、当時文学部のあった御影学舎（現在は御影工業高校の校舎となっている）まで京都からさがしに出かけて来たので、私もびっくりしました。当日私は大学の教授会に出席していたのですが、いくら「拘束嫌い」だからとはいえ、今日から考えれば少し反省するところもあります。もっとも、最近は家内にも行先についてはだいたいのところを告げて外出しておりますので、少し真面目になったのかもしれません。（笑）

私も昨年還暦を迎え神戸大学を退官する日も次第に迫ってまいりました。退官後は私立大学などへ新たに奉職され、引き続き学生の指導や後進の育成にあたられる方々が多いようです。しかし、私は大学からも解放されたいという念で一杯で、退官の日を楽しみにしております。現在よりさらに一層のびのびと自由に自分のやりたいことに専念したいという気持ちが日増しに強くなっているのが本当のところです。このたび野呂栄太郎賞を受賞しましたことは、私のこういう心境とのかかわりでも大変感慨深いものがあり、私自身の思いをさらに掻きたてるものがあります。自分の意志で選び今日まで歩んできたこの道にさらに一層専心できればという希望で一杯であります。

今日は大変楽しい会に盛り立てていただき本当にありがとうございました。

祝辞

神戸大学文学部長
高尾一彦

杉之原先生。野呂栄太郎賞ご受賞、おめでとうございます。人文・社会科学関係にもいろいろな賞がありますが、そのなかでも野呂栄太郎賞は人民解放や平和建設の功労賞とでもいうべきものですから、日本国民が杉之原先生の業績に与えた勲章と申しても過言ではありません。だから、ほんとうに名誉なことだと思います。

じつは杉之原先生がこんなに偉い先生であるとは知りませんでした。（笑）まあほんとはそんなことありませんけど。

杉之原先生と私とはうんと若い時代に出会いました。旧制の高等学校で同じクラスだったんです。私どもが三高の文科に入学したのは昭和十六年のことですから、それいらいのことになります。おまけに旧制高校では生徒の机をアイウエオ順にならべて坐らせましたので、杉之原先生はサ行の最後、私はタ行の最初で、彼はいつも私の前の机に坐っていました。勉強のほうも、杉之原先生のほうがはるかによく出来ましたから、私はいつも彼のあとをついていたことになります。

大学も同じ京都大学の文学部で、杉之原先生は社会学、

私は日本史を専攻しました。在学中に学徒動員で軍隊に引っぱり出され、二人とも海軍にまいり、部隊は違いましたが沈みもせずに大学に戻りました。大学卒業後、またまた二人とも同じ神戸大学文学部に職をえました。ついこの間まで、杉之原先生のいる社会調査室と私のいる古文書室は隣どうしで、腐れ縁といいますか悪縁と申しますか。(笑)

そんなしだいで、私はいつも杉之原先生のうしろにひかえている始末でございます。けれども前の先生が偉いから、後もそうとは限りませんので、これからは杉之原先生にあやかることが出来ますよう、民衆の幸福と平和に心を致し努力することで祝詞に代えます。

神戸大学経済学部教授
則武保夫

この度のご受賞大変おめでとうございます。

部落問題は日本の社会にとって重要な問題ですが、杉之原さんはこの問題を理論的かつ実証的に研究され、しかも科学的社会主義の立場を貫かれました。まことに偉大な成果を築かれたと考えております。加えて、部落問題を単に学問の対象としただけではなく、兵庫部落問題研究所を設立し自ら主宰したり、解放運動でも重要な職責を果たされるなどしてきました。この度野呂栄太郎賞の受賞著作となった『現代部落差別の研究』も単に学問的に部落問題を解明するだけではなく、現実に存在する部落問題を解決するという課題に立って、政策的問題にまで踏み込んだ論及がなされています。杉之原さんの部落問題との接し方をよく浮き彫りにしていると思います。

文学部には昔から立派な先生がおられそれぞれ多士済々でありますが、杉之原さんもそのひとりであり、また一流の学者だと思っています。だいたい一流の学者というのは理論と実践の両面にわたる貢献をするというのが条件であり、それのできないのは二流だと考えているからです。私は別に杉之原さんを持ちあげるつもりで言っているのではなく、実感としてそう思っています　研究所をつくり、その運営のための労を厭わず、資金面での援助にも先頭にたってこられたと同時に、学会で十分通用するどころか、この分野で学会自体を引っ張っていけるだけの研究もなされてきたのですから。並大抵でできることではありません。

先日私は学術会議の用事で東京に行く機会がありましたが、その時今回の杉之原さんの受賞を知っておられる方々から「神戸大学にも偉い先生がいるのですねえ」という言葉を幾度か聞きました。神戸大学には従来から立派な先生がたくさんおられると私は思ってきたので、そういう発言に接して「何を今さら」という反発する気持ちもありました。しかし、考え直してみると、杉之原さんの今回の受賞

を契機に神戸大学全体の学術的な存在意義が改めて見直されたことはやはり喜ばしいことです。その意味では、杉之原さんの仕事に対して大変感謝したい気持ちですし、こういう仕事をした先生が神戸大学におられることは誇り高いことだと思っています。

これからも健康に留意せられ、益々ご活躍くださるよう切にお願いして、私のお祝いの言葉にかえさせていただきます。

神戸大学文学部教授
井上庄七

この度は大変おめでとうございます。さきほど小野先生より杉之原さんはタフな人だという話がありましたが、同じ文学部にいて永年付きあってきた僕などもまったく同感で、杉之原さんと同じ研究室の長谷川さんと一緒にしばしば感心している次第です。僕が入院したという話は周囲の人も信じるでしょうが、杉之原さんが入院したという話は誰も信用しないでしょう。杉之原さんの奥さんもそのことはよくご承知のようです。僕が電話をすると奥さんはいつも「井上さん、お元気ですか」と気遣って下さいますが、僕が返礼に「先生の方はどうですか」と言うと、奥さんは「あの人は病気になるような人ではありません」とおっしゃいます。(笑)

冗談はさておき、杉之原さんの今回の受賞の背景としてもう一つ付け加えておきます。それは、自分の正しいと思う主張を放棄することなく最後まで粘り強く貫き通す姿勢です。ずっと以前杉之原さんが京大の助手から神戸大学へ転任する時、文部省・大学側の示した採用条件は不合理だとして、談判したことがあることを堀先生(社会学名誉教授)より聞きました。そして、そのために赴任が数カ月遅れたということです。こういうことは普通の人間には容易にできないことであり、杉之原さんの性格をよく象徴しています。部落問題という非常に困難な分野でこのような貢献をすることができたのは、やはり杉之原さんの頑固なまでの自己主張の強さがあったからだと思っています。

杉之原さんは今日「部落問題の杉之原」で名をはせておりますが、僕のように哲学をやっている人間には「ルソー研究の杉之原」という記憶もあることを一言付け加えさせていただき、僕のお祝いの言葉とします。